

「アジアユースリーダーズ」オンラインで開催

公益財団法人イオンワンパーセントクラブ(千葉市)が主催する高校生対象の「アジアユースリーダーズ」(文部科学省後援)が2020年12月17~19日、オンラインで開かれた。新型コロナウイルス感染問題が長引くなか、自分たちが直面した学校教育の問題について、アジアの9カ国の若者が国の枠を超えて話し合った。【明珍美紀】



全行程を終えて、参加証明証を手にする高校生たち

多様な視点から見えてくる問題を提起

ウィルスのパンデミック(世界的流行)が人々に及ぼした影響は計り知れない。アジアユースリーダーズは、アジア地域の高校生が社会的課題について意見交換し、解決策を提案する多国籍交流プログラム。そこで今回は、コロナ禍で見えてきた学校教育の課題をテーマにすえた。日本、インドネシア、カンボジア、ベトナム、タイ、マレーシア、中国、ミャンマー、ラオスの9カ国の

高校生計72人が参加し、英語を共通言語にインターネットでそれぞれつなぐオンライン形式で討論が行われた。

「コロナ禍に襲われる現在の状況は、1970年代の2度の石油危機、08年のリーマン・ショックよりもはるかに打撃が大きく、経済活動はマイナスになっています。なぜだと思いますか」

ディスカッションを通じて感じた相互理解の重要性

講義の後は、チーム別のディスカッション。東京の会場に設置された大型のスクリーンに、各国の高校生が討論する姿が映し出された。コロナ禍が深刻化した昨春以降、各国の教育現場は対応に追われた。神戸市立蒼台高2年の

小西朝陽さん(17)は、学校の休校期間中、オンライン授業を導入した学校と、そうでない学校があったことを報告し、こうした



画面を通じて積極的なディスカッションが行われた

学校の「格差是正」を求めた。一方、名古屋大学教育学部附属高2年の富田翔さん(17)は、公衆衛生の面から「新型コロナウイルスのワクチンの有効性が実証されれば学校でも推奨した方がいいのでは」と問題提起した。「コロナに限らず、ウイルスとの関係は人間が考えていかなければ



いけない課題の一つと考えたからだ。これらの討論を経たうえで、最終日の成果発表では「ハード面(タブレットの無償提供)の促進でデジタル格差を縮める」「他国との連携による技術力とシステムを教育に」「農村部の学生、恵まれない学生への財政援助」などの提案があった。教育の場でのメンタルヘルスケア、カウンセリング、校内診療(保健室)の改善

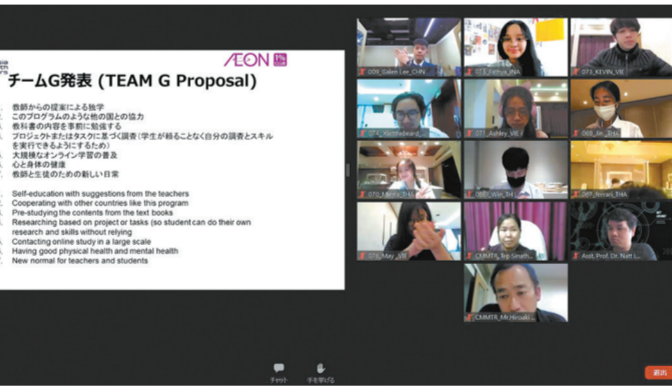
などの意見も挙げた。石川県立金沢泉丘高2年の左利碧彩さん(17)は終了後「他国の生徒は英語が上手で積極的。タイの男子が『意見はありますか』と聞いてくれ、話の輪に入ることができた」と言い、「多角的な視点で物事を考える機会になった」と感想を述べた。

新しい世界へ国境を超え共感する場
講評者は、カンボジアの教育青年スポーツ省のトップ・シナット総局長、タイ・チュラロンコン大学工学部のナット・リラーワット准教授、名古屋大学教育学部附属中学・高校の三小田博昭副校長の3人が務めた。クロージングセレモニーで、三小田副校長は「コロナ禍のような状況



イオンワンパーセントクラブ 横尾博理事長

は新しいものが生まれるチャンス。猛スピードで進化しているITシステムを使いこなし、新しい世界をつくらせてください」と若者たちを励ました。イオンワンパーセントクラブの横尾博理事長は、「世界がウイルス問題に向き合うときに、互いの違いを理解し、なおかつ共感する場を持つことがオンラインで実現できた」と話していた。



最終プレゼンテーションでは各チームが解決策を提案

討論前の基調講演。講師を務めた国際大学の伊丹敬之学長が各国の高校生たちとこう問いかけた。「その理由は、人と人が接するサービス業が自粛され、人の移動が止まったため、ボーダーレスではなくボーダール

になってしまったから。コロナ後を見据えたこれからは、対面を重視したインターネット(相互作用)が大切になってくる」と伊丹学長は言い、人間的なつながりを取り戻すため、互いに情報を共有して協力することが重要だと

話した。民間企業からはバン格拉デシユなど6カ国でバッグなどのものづくりを展開する「マザーハウス」の



株式会社マザーハウス 山崎大祐副社長

山崎大祐副社長が登壇。「経営者と雇用者の垣根をつくらない」など自社の理念を説明した。インドネシアの高校生が、コロナ禍の下での対応を質問すると、山崎さんは「国や地域のルールを順守したうえで、職人たちが在宅でも商品をつくること」ができた」と答えた。

東京大学大学院教育学部研究科の北村友人准教授は「コロナ禍で変化した社会を『ニューノーマル』(新たな常態)と位置づけ、その中で『SDGs』(国連の持続可能な開発目標)を実現する教育のあり方について

山崎大祐副社長が登壇。「経営者と雇用者の垣根をつくらない」など自社の理念を説明した。インドネシアの高校生が、コロナ禍の下での対応を質問すると、山崎さんは「国や地域のルールを順守したうえで、職人たちが在宅でも商品をつくること」ができた」と答えた。

アジアユースリーダーズとは

イオンワンパーセントクラブが企画、実施する友好促進プログラムの一つで2010年にスタート。次代を担うアジアの高校生が多国籍交流を通じて価値観の多様性を学び、同世代のネットワークをつくる機会を提供している。17~19年の3年間は「食と健康」がテーマだった。今回を含め参加者は延べ約1000人になった。



各国の高校生の声 同世代からの刺激、新たな視点も

中国
天津新華高校
李 昆泰さん(16)

相違点よりも共通点の方が多いこと、メンバーの意見をよく聞くことが大事だと思った。国際協力の大切さを周囲に伝え、固定観念を打ち破る努力をしていきたい。

マレーシア
MRSM・クアラ・ベラン高校
アーマンド・ムハムド・アジヤン・ザリフさん(15)

アジア各国の教育事情についてさまざまな視点から学ぶことができた。対面式であればもっとコミュニケーションを深めることができたと思う。

タイ
バトゥムワン・デモンストレーション高校
シリユムサ・オニチャさん(16)

私たちの文化が他国と似ているところ、異なる点を話し合うことができた。コロナ禍の影響は国によって違うので、引き続き連絡し合っていきたい。

インドネシア
スマン2シビノン高校
リカン・フィロス・ザイマさん(16)

じっくりと考えてから自分の正直な意見を伝えなければならなかった。短期間だったが新しい友だちができ、新しい知識も得ることができた。

ミャンマー
ヤンゴン教育大学附属
フラクティンシグ高校
カン・ニャー・ナンダさん(16)

人と人との絆の大切さを感じた。ミャンマーでもVR(バーチャルリアリティ)学習プログラムなど先進的なシステムを教育に応用していくよう求めていく。

ベトナム
グエン・フー・ファン高校
チャン・トゥアン・キエトさん(17)

討論の初めに互いのことを知るため生い立ちの話を共有した。異なるバックグラウンドを持つチームメイトから学ぶべきことがたくさんあると実感した。

